

書評

M. T. S. サイミイ著『社会学者としての
M. B. サイミイ著『社会学者としての
チャールズ・ブース』

T. S. Simey and M. B. Simey: Charles Booth.
Social Scientist,
Oxford University Press, 1960. pp. x+282.

石田 忠

チャールズ・ブースの名と彼の著書のタイトルは社会問題又は社会調査が論ぜられる場合には、いつでも、引き合いに出されるほどに有名であるが、「ブースは尊敬されているほどには読まれていない」(七頁)といわれている。また彼が亡くなつてから既に半世紀にもなろうとしているが、ブースの人物とその仕事について何かを述べようとする場合、ひとは彼の妻による追憶記(Mary Booth: Charles Booth—A Memoir, London, 1918)か、又は彼のもとで社会調査家としての徒弟修業をうけたミアトリス・ウェブの自伝の一節(Beatrice Webb: My Apprenticeship, London, 1926, Chap. V)にたゞよりほ

かはなかったのである。

しかるに最近ロンドンにおいてチャールズ・ブースにかかわる二冊の著書が相ついで出版された。即ち一つは A. H. John: A Liverpool Merchant House, Being the History of Alfred Booth and Company, 1863—1958. George Allen & Unwin, 1959. であり、他はここに紹介しようとするサイミイたちのそれである。前者においては、その副題にも明かなように、アルフレッド・ブース会社の歴史がロンドン大学の経済史の講師によって辿られているが、そこには商人ならびに工業家としてのチャールズ・ブースの研究が含まれている。これに対して後者においては、リヴァプール大学のチャールズ・ブース記念社会科学講座の担当教授 T. S. サイミイらによって社会科学者としてのチャールズ・ブースがとりあつかわれている。

チャールズ・ブース Charles James Booth は一八四〇年三月三〇日に Liverpool で生まれ、一九一六年一月一六日に Gracedieu でその生を終えたが、その七六年の生涯において彼はリヴァプールの一商家を国際的な大会社に仕上げると同時に、世紀末の一七〇年に亘る「ロンドン調査」によって英国社会史上に不滅の名をのこした。

既にミアトリス・ウェブはチャールズ・ブースを社会科学者として評価することを試みたが、彼女のあとには絶えてこの努力をつづけるものがなかった。

今、二〇世紀も半ばを過ぎてようやくに社会科学者としてのチャールズ・ブースの仕事の再評価が試みられようとしている

ものの如くである。そしてこのことのもつべき意義の自覚においてサイミイたちは決して孤立しているわけではないのである。たとえば Asa Briggs の論文(“Signpost to the Welfare State.” The New Statesman and Nation, February 4, 1956.)もこのことを示している。

二

さて、サイミイたちは「一人のヴィクトリア時代の実業家が、いかにして、英国の社会学及び社会政策 (social policy) に重要な貢献をなすに至ったか、その次第を叙述し説明しよう」と試みている。(一頁)そして本書のすべては視角のこのような設定にこそあるのである。それによって著者たちは社会学上の一つの問題提起を試みているわけである。

「ブースの経験と彼の時代へのブースの貢献とは、一人の個人の彼自身の生活の一部として、又人間の理解の範囲を拡げようという、全ての人類に共通な、非個人的な努力の一部として、同時に考察されねばならない。社会調査の対象と調査する人との間の、又これらの両者とその調査の行われる社会との間の、関係ということに特別の留意がなされねばならない。これらは社会調査と社会史の、殆ど研究されておらず、又その重要性も殆ど認識されていない、面である」(一〇〜一一頁)が、このほかの方法では接近し得べくもない課題をこそ著者たちは設定しているのである。

サイミイたちによれば「(人間の社会的活動と彼の属する社

会の構造) これらが結合されているという事実が、どこまで、科学的探求の装置を社会問題の理解に適用することを可能ならしめるかという問題は未だ的確には回答を与えられずに残っている」(二〜三頁)のであるが、「この問題こそがチャールズ・ブースの仕事の根底に横たわっているのである。彼の社会科学への貢献のもつ意きは、単に彼がそれに回答を与えようとしたということからではなく、彼こそは回答を与えらるべきことを認識した最初の一人であったということから生まれるのである。」(三頁)

「彼の出発点は、その繁栄が貧困と不可ひ的に結びつけられている世界における富裕者として彼自らがつき当った道德的なジレンマ (moral dilemma) であった。しかしこのことは彼をして思弁のために客観性を捨てしめることはしなかった。(三頁) 彼の終局的な目的は民衆の状態の改善をもたらすことではあったが、社会改良の基礎を「大理論からつくり出し」「事実や統計をそれに当てはめる」というようなことはしなかった。

「実際において彼がなさんとしたことは、一方の端には評価とか責任とかというような問題にかかわる主體的な判断が位置し、他方の端には人口統計的というようなデータの非人格的な叙述と分析が位置を占めている階梯上に中間点を立てることであった。」(三頁)「これらの先駆的な努力から生れた成功の故にこそ彼は今日経験社会学の創始者として考えられねばならないのである。」(四頁)

チャールズ・ブースへのこのような接近の背後には社会学の

現状に対する著者たちの批判が横たわっている。そしてそれがブーアの再評価を彼らにとって有意義なものたらしめている。しかしこの評価はあくまでも客観的なものでなければならぬ。彼らがブーアを振り返って見ようとするのは、そこへかえるためではない。著者たちはブーアの「結論の真实性と彼の努力の有効性を確立し説明する」(一一頁)ことよって実はブーアを乗りこえようとしているのである。かくて著者たちの方法は現に見る如きものたらざるを得なかった。

三

そこで著者たちは、先ず、チャールズ・ブーアが、「彼がその産物であり又その伝統と哲学とに生涯に亘って貞節をささげたところの商人階級 (merchant class) の典型的にして最も魅力的な模型」(三〇頁)であったことを明かにする。

即ち、ブーアが生れた頃のリヴァプールは「市民にとつては限らない発展と繁栄の時代の入り口に立っているように思われた」(一五頁)がここは「本質的に商人の社会」(一四頁)であった。ここでは商業と文化とは分ちがたく結びついていた。商業というのは単に蓄財の手段だけでなく、それは同時に一つの生活方式で、同胞に誠実なサーヴィスを提供し、それに対して公正な報酬が期待せられてよい機会たるものであった。当時の商人社会に慣習たりし徒弟修業を終えたのち、チャールズは兄アルフレッド Alfred と船会社をはじめた。彼は「事業のもつ危険、喜び、興ふんを心から楽しんだ」(二二頁)が、

これら初期の数カ年の経験のなかでブーアは「理性と方法への信頼」を身につけることになった。即ち「あらゆる状況を簡潔な事実と数字にうつす習慣」(二三頁)と「詳細な情報に基いて一つの包括的な像をつくりあげる才能」(二七頁)とを發展させたのである。

そして商業的な誠実さというものを一つの生活方式としてうけ入れた。「私ごとと商取引に適用さるべき道德的原理の間には何らの区別もあり得ないものであった。」(二九頁)そして同時に「富をもっているということは特権と同時に義務を伴うものである」という Unitarian 原則」(二九頁)をも彼は継承した。富める者の豊かな生活は、「心からの同情と惜しみなき慈善」をもって、その社会的義務が果されることよってのみ正当化さるべきものであった。

しかし若い Unitarian たちはやがて、「伝統的な慈恵が新しい貧民階級の慢性的な窮乏の前には明かに不適切なものである」という、正にそのことが既存の生活秩序への挑戦を成している」(三四頁)ということを意識しないではいられなくなった。一八五六年の選挙運動のなかで個人としての貧困者じかに接触したブーアは貧困のたえざる存在を正当化しようとするところの、信仰深い人たちによって提出されている、説明を偽善的なものとして非難するに何のためらいをもたなくなった。

一八六八年ブーアは Mary Macanlay と知り合った。彼女は新しい知識階級の典型的なメンバーであった。ブーアも自分の属する社会に対して批判的ではあったが、その基本的な仮説

に挑戦することはしなかった。しかし彼女は正にそれに挑んでいたのである。ブースははじめて人間と状態とに対し鋭い吟味の目を向けることになった。比類なき繁栄のさ中の広範なる貧困という解きがたき矛盾は彼をして自分の古い信仰の破壊と新しいそれ——Positivism——の受容に向って駆り立てた。

一八七〇年代の不況はおそるべき規模での窮乏を生み出した。「中間階級」は人民大衆の貧困を深く心にとどめた。それを彼ら自身の安全への脅威及び彼ら自身のよき意図への非難たるものと考えた。併しそれをどうしたらよいか。(六二頁) ブースの関心は極めて実際的なものとなった。

他方、「彼が会社経営に成功したことは彼がこれまで育てられて来た個人主義への忠誠心を強めた」(六三頁)のであって、「社会問題に関する彼の見解は社会の構造に急進的な変革をもたらすというよりはむしろ現在の状態を改良すると同時にこれを正当化しようという固い決心に支配されていた」(六四頁)これは彼の問題接近を極めて現実的なものたらしめたのであって、彼は先ず事実を確かめることにした。一八八五年の冬は貧困者の困苦を激化し、大衆の暴力のばく発に對するおそれが生じた。ブースは急がなければならなかった。一八八六年四月七日ブースの「統計調査会」は第一回の会合をもったのである。

四

「ブースが他に求めて得られなかったもの、そして社会問題の解決には不可欠と確信せるところのものは、状況を——その

あるべき又はなるであろう姿においてではなく——現にあるがままに、囚われずかたよらず、表出するということであった。」(七七頁)このための枠組み (framework) を「つくること」これこそがブースの腐心せるところであった。「枠組みなるものは一つの大理論からつくり出せるものだ。事実や統計はそれに合わせてはまりこむ——しかし私が求め度いのはそんなものではなくて、遂には理論と法則そしてより賢明なる行為の基礎がそこから徐々にでてくるような事実の集積を、これを受容するためにつくられるところの大きい統計の枠組み (a large statistical framework) である。とり扱われる諸事実のあらゆる複雑な関係のなかにあって、諸事實は共通に一つのものをもっているに相異なる、一つのものとはこの枠組みのなかにおけるそれらの位置 (place) である。——この枠組みがなくては事實は何の役にも立たないのである。」(七七—七八頁)このような性格の枠組みのなかにおいてのみ「あらゆる雑多な情報の整合が可能となるであろう」(九〇頁)とブースは考えた。方法のかかる展開において彼を導いたものは「あらゆる社会問題は解決されるためには、或は正しく説明されるためにさえも、それを構成する諸要素に解体されることが必要だ」(九〇頁)という信念であった。

このような方法的な基礎に立って、ブースは分類の体系をうちたてた。そして人口の社会的分類に当ってブースは「社会科学への彼のもっとも卓越せる一貢献」(八八頁)たる「貧乏線」の概念をつくったのである。

今後の全ての調査の結果がはめこまれ得べき統計的枠組みの骨格をつくりあげたブースは、今や全人口の生活と労働の分析をすすめることができると感じた。

一八八九年四月にはその後十七巻にも達することになった「ロンドンの民衆の生活と労働」の第一巻が出版された。得られた成果そのものの価値もさりながら、「彼は人間社会が統計と観察の組み合わせによって分析され、叙述され得るということを証明することに成功した。もっと特殊的には今や政治家や博愛家がその改革案の基礎となし得るところの正確にして事実的な根拠を提供することが可能になった。」(一一〇頁)

しかし民衆の生活について彼があつめた諸事実は問題を明かにすることはできたが、その解決に十分な光りを投ずることはできなかった。ブースの階級B(極貧者の階級)が社会問題のなめたることは分つたが、それにいかに対処すべきかを示すことは容易ではなかった。

民衆の生活は彼らの労働との関連において研究されねばならない。この関連のなかにこそ貧困研究によって明かにされた未解決の問題が横たわっているのではないか。ブースはこのような期待をもって民衆の労働に関する調査に入つて行つた。

しかし「現われたものは資本家的企業への彼の信頼の誓約であった。結局、彼の見たところのもの及び彼が己の見方で自分の周りの世界でそれを見たままの経済人の自画像であった。これは彼が生きたままの生活であった。」(一三一頁)したがって「蓄積された龐大な情報から、又多年に亘る苦勞からも『あ

らゆる問題の中の問題』(富裕の中の貧困)への積極的な回答はでて来なかった。」(一三五頁)

彼はどうしてもこの段階で仕事を終える気にはならなかった。「日々の生活が家庭の性格、教育又はレクレイションの機会及び雇用の機会によって規定せられるように、その他にも生活構造の正の一部を成している社会的な諸力(social influences)が存在しているからである。」かくて民衆の宗教に関する調査が行われることになった。しかし「彼の分析は教会が階級構造を変える力としてはたらくよりは、それに己を適合せしめているという結論をもたらしした。」(一四九頁)かくてここから遂に貧困問題の解決の方途は生まれ出ては来なかった。

一九〇三年六月彼の「調査」を終わるに当ってブースは自分の調査の最終目的が達成されなかったという遺憾の意の表明に近いものを述べざるを得なかった。

しかし実は「彼がその関連を解釈することさえできたならば、彼の老齡年金運動への関与は、彼が調査のなかであつめたような証拠(evidence)の分析からいかに又どの程度まで社会問題解決への貢献が生れ得たかについて彼の必要とするあらゆる証拠を与えることができていたのである。」(一六〇頁)

著者たちはこのことを明かにするためにブースの「この運動への参与が二十世紀の産業社会のよって以て再編され得べき新しい諸原理をたてるに至らしめた次第」を示している。だから、ブースがそれを擲むことさえできていたならば、福祉国家の礎石になった諸原理が彼の仕事の成果の間に包含されていた

のである。

しかし彼はこれらの諸原理を一つの体系にまとめて把握することができなかった。そして却って一八三四年の救貧法の世界の方へ顔を向けてしまったのである。ブリスは自分の手の届くところにあった「可能性」に気づかなかつた。しかしこの「可能性」の故にこそ著者たちはブリスの仕事の評価に意味を見出すのである。

五

チャールズ・ブリスのロンドン調査は三つ——Poverty, Industry, Religious Influences——のシリーズから成っている。著者たちの評価はこの順序で夫々についてすすめられる。

さて当時に支配的な貧困観は貧困を以て貧困者の怠だ又は不道徳に由るものとしたが、ブリスはこのような主張に対して勇敢に挑戦した。ここに彼のオリジナルな思想家としての偉大さがあるが、ブリスは怠だ及び不道徳と、それらが育つ諸条件とを区別することを求めた。このような新しい接近方法は極めて大きな効果をもたらした。例えば当時貧困の最大の原因とされた「飲酒が、実は貧困の原因であるよりはむしろ結果である」(一八〇頁)ことを彼は初めて明かにしたのである。

このように貧困の原因が道徳的なものであるよりは、すぐれた社会的なものであることを明かにしたことのほかに、のちにラウントリーによってその重要性が確立された「貧困の循環」(Poverty Cycle)の現象をも彼はとらえていたのである。

最も卓越せる方法上の革新は貧乏線をつくったということである。ブリスの貧困の定きは「彼の暫定的な仮説の真偽が実験的に検証され得る手段を与えたという意味において」「恐らく社会科学における最初の操作的な定きである」(一八四頁)

こうして、ブリスは貧困の測定に成功したのであるが、ブリスの仕事の評価をこの点に限ることは公正でない。けだし彼は単に調査技術の発明者にとどまるものではない、むしろ彼の Poverty survey が社会学へなした貢献の意気に着目すべきである。ブリスはこの Poverty survey のなかで「事実発見的、統計的分析の新しい方法を確立したのである」(一九〇頁)「彼の得た諸結果が彼の予想や希望と矛盾したということ、したがって彼の仕事は彼の希望的思考によって左右されるということがなかつたということ」(一九一頁)また「新しい仮説が速やかに最初の、そして最もナイヴな仮説に代って現われたという事実によつても Poverty survey の科学性は証明されている」(一九〇頁)

しかしブリスも一定の偏向(bias)を免れることはできなかった。この偏向は彼の事実解釈に影響を与え、それが調査において発見した証拠とは殆ど関わりのない先験的な推理に基いた改良計画を彼にたてしめることになった。

しかし「諸事実が十分な力と明かさをもつて語るならば、彼はそれらをして欲するままに語らしめる用意をもつていた。たとえその結果が彼の個人的な好みに反するとしてもそうなのであって、このことは彼の老齢の年金唱導がそれだけで明かに

しているところである。」(一九六頁)

むしろ Poverty survey における重要な弱点は彼が十分に入念にして明確な「分析の枠組み」(framework of analysis) 即ち「彼の調査に方向を与え、又自分の蒐めた材料の全部ではなく、そのあるものを有意義なものとして選ぶように彼を導いた分析装置 (analytical apparatus)」(二二二頁) をつくりあげることができなかったという点である。

それでも Poverty survey の場合には「貧困について彼がひき出した諸事実のもつ強制的な性格が彼をして、実際上は ready-made の分析の枠組みたりしものを採用することを余儀なくせしめた。」(二〇〇頁) けれどもいつもそううまくゆくとに限らず、「Industry series においては事実が『自ら語る』ことをゆるし、又同時に全体としての作業に統一と意味とを与えたであろうような事実の表出の方法を探しても無駄である。」(二〇〇頁) ここではブリスはデータを表出する筋の通った理解のできる方法をもつことができなかった。したがって「このシリーズの意味は産業組織の叙述としてのメリットに見出さるべきである。」(二〇一頁)

このシリーズにおいては「民衆の状態と産業組織とのテーマはたえず結びつけられたが、効果的に噛み合わされることはなかった。」(二〇一頁)「貧困(又は消費)に関する事実が雇用(又は生産)に関する事実に積み重ねられ、以て全体としての産業社会のくまなき姿の得らるべき方法」(二〇三頁)にブリスは成功しなかったからである、かくて調査の industrial な面

と social な面とは結びつけられないままに残った。したがって「産業が社会福祉の底に横たわる基盤として役立っていると同時に、他方では貧困を創出する主要な要因の一つとしてはたらいっている工合」(二〇一頁)は明かにされることがなかった。むしろブリスは貧困と雇用・老齢・失業等との結びつきを追いかけるべきであったのだ。

調査の三番目のシリーズ——Religious Influences series——の評価は、そこでブリスが追っかけた二つの路線を明かにすることがなくては混乱するだけである。即ちブリスが分析を進めた路線の一つは「各教会の制度的構造は、それがその一部であると考えられ得るところの社会の構造との関連の見地から叙述され、評定され得るといふ仮説」(二二二頁)に基くものであった。これは「宗教の社会学」の発展へ向った途であった。これに対して第二の分析路線は社会の道德的生活が宗教の教えによって影響される程度の発見に導いたもので、これは社会科学者よりはむしろ哲学者及び神学者に属するものと考えられて来た領域へ進出するものであった。何れにせよ「彼は社会調査の境界を、比較的厳密に『社会的なもの』が『道德的なもの』及び『宗教的なもの』に密接に結びつく点にまで拡げることによって社会学的知識に附加するところがあったのである。」(二五六頁)

以上を要するに彼は「一般理論」(一九七頁)をうちたてることはできなかったけれども、それでもなお「ブリスは偉大な統計家というよりは偉大な社会学者であった。」(二四七頁)こ

のことが承認されるべき彼の最も強い資格は「彼が客観的な調査によって答えられ得るように問題をたてることをした」(二四七頁)ということにある。「ブリスが社会学への寄与としての重要性を少ないものたらしめたということをいふのは、直接に社会的現実に適用できるような類の理論の発展ということに、正しい計画の下の経験的研究がもっている特別の価値を無視するものである。経験的調査が社会学的知識の進展にとって不可欠のものとして認められねばならないのは、それが我々の社会の性格についての説明の発達のための特に肥沃な土壌を与えるからであり、又それはこれらの説明を説得的に検証する唯一の方法を与えるからである。」(二四九頁)このことを証明することによってブリスは社会学の論理に貢献し、また「福祉国家の創造に用いられる強力な道具」(二六六頁)を国民に与えたのである。

六

以上は本書の概要である。というよりはむしろおよその骨組みを辿ってみたというほどのものにすぎない。

そこでは「社会調査」への新しい接近が試みられている。余りにも技術的な「社会調査」論のはんらんなかではその「新しさ」は殊のほか印象的である。

「本書の底に横たわっているテーマは社会変化の問題であり、それを統御する方法の発見である。」(一頁)社会研究のブリスの方法を社会史の検証を通して評定することによって著者

たちは自分のテーマへの promising な接近を試みている。著者たちの分析はこのことを疑わしめない。

しかしそうは云っても著者たちの方法には些かの疑問も残っていないというわけではない。著者たちは「福祉国家」に囚われている。そのことがブリスの仕事への接近に狭い枠をはめることになった。著者たちによってロンドン調査の三つの構成部分は相互に切り離されて評定されていることがそれである。

しかしブリスの構想においては三つのシリーズは当初から深い相関の下に置かれていた。ブリスは Industry & Religion もこれらを「生活構造の正に一部を成す social influence」としてとらえていた。勿論ブリスは全ての social influence を調査することは企てなかった。しかし各 social influence を全体として一つの構造に統一するものをとらえる努力をしないわけにはいかなかった。成功的ではなかったけれども各シリーズに導入された社会階級の視点が即ちそれである。

ブリスのこの努力が何故成功しなかったか。このことの究明にこそブリス研究のかなめがある。けだし我々のとらえた社会的主体が歴史のなかに生々とはたらくことを見る時のみ我々はじめて我々の社会構造把握の正しさの実証を得ることができるからである。ブリスの失敗を説明するかきは Industry & Religion にある。しかしこはこれ以上を云う場所ではない。

サイミイたちの「社会史」は、それがブリスの仕事の評価の基準とされる途端に、社会的主体が生きてはたらくようなものではなくってしまふ。社会史にかわって「福祉国家」が出て

くる。それはブースの方法によってとらえられるべき社会構造を全体として評定し得る基準を与えるようなものではない。そこには主体がない。したがってブースの方法がよくその主体をとらえ得るかどうかというようなことは初めから問題にならないのである。

しかしそれではサイミイたちは、社会構造及び社会変化の包

括的な説明をもたらすような——そしてブースには遂にとらえられなかった——「分析の枠組み」をいかにしてうちたてることができるであろうか。それを現実によって検証することがいかにして可能となるであろうか。(頁数を附した引用はすべてサイミイたちの著書からのものである。)

(一橋大学助教授)